

登場人物

市ノ瀬有紀(20)

青井忠志(14)

スプレッドイーグル

梶下直哉(すぎしたなおや)

有紀(独白)「私が、その鷺の絵を初めて見たのは、ちょうど雪虫が飛び始める冬の始まりの頃だった」

人々のざわめき。

「すごいね」「どうやって書いたんだべ？」等々。

テレビのニュース

女子アナウンサー「最近、札幌を騒がせている謎の鷺の絵ですが、今度は、何と札幌ドームの壁にも描かれている事が発見されました」

コメンテーター「よくあるストーリー系の落書きのレベル、という訳ではなくアールと言っても通じますね。いや、上手い。ロマンがあると思いませんか？」

女子アナウンサー「(きつぱり)ただの犯罪です」

有紀(N)「野次馬が全員いなくなっても、私はその驚から目を離す事が出来なかった。そんな私を嘲笑うかのようにその鷺は翼を広げて飛んでいく。翼を広げた鷺。スプレッドイーグル」

有紀の想像。大きく羽ばたく翼の音。高く、高く飛んでいく。

有紀(N)「その鷺は私に言う。お前はどうし

て飛ばないんだ？」

有紀の想像。

スプレッドイーグルが、自らの存在を誇示するがごとく、甲高く咆吼する――信号「とおりやんせ」の音が止まり、多くの人々が道を渡っていく。強風にあおられ、悲鳴をあげる人もいて。

テレビのニュース。

女子アナウンサー「・・・北海道上空には台風並みの低気圧が近づいている模様です」

コメンテーター「すごいですね。まさに爆弾低気圧」

携帯の着信。留守電になって。

コーチ「有紀、いい加減にすれや。お前いつまで逃げてんだ？このままだと本当に選手として終わりだぞッ。とにかく連絡すれ。分かったなッ(切れて)」

猛吹雪。雪を踏みしめて歩く。

有紀(N)「地下鉄の駅を降り、何とか札幌ドームに辿り着く。が、鷺の絵が何処かさっぱり分からなかった。全部雪で真っ白。苛立った私は立ち入り禁止区域へ」

柵を乗り越え、ドサツと尻餅。

有紀「あれ？・・・ない」

有紀(N)「考えてみれば当たり前だった。悪戯書きを何ヶ月も放置しておく訳がない。ああ、何て私はバカなんだ。それでも諦めきれず壁をなぞる。もしかして、輪郭ぐらい残ってるかもなんて・・・」

物音がして。

有紀(N)「警備員に見つかったと思って、私は焦って振り返った。そこにいたのは、大柄な高校生ぐらいの少年だった。彼は慌てて逃げようとした、けど」

突風。バサツとノートが飛ばされる。

少年「あッ」

有紀(N)「少年の持っていたノートが風に飛ばされて私の足元に落ちた」

少年「見んなヤッ」

有紀「(めくって)・・・うっそ」

有紀(N)「そのノートに描かれていたのは、間違いなく鷺だった。札幌中に騒がしている翼を広げた鷺のデッサン」

少年「返せって」

有紀(N)「少年が掴みかかってきたけど、軽
くないなしてやった」

有紀「・・・君が犯人なの？」

少年「・・・何言ってるの？」

有紀「このまま警察行っちゃおう？」

少年「そんなノートが何の証拠になるんだよ
ッ。そんなんで俺が驚書いた犯人になる
訳ねえべやッ」

有紀「警察もバカじゃないっしょ。このノー
トの鷲と札幌中に描かれてる鷲を比べて
鑑定とかしちゃうんじゃない？筆跡鑑定
の別バージョンみたいなの。したら、君ど
うすんの？」

カチャッとか何かを取り出す少年。

有紀(N)「少年は震える手で、折たたみ式
のナイフを取り出した」

有紀「いいよ、刺しても」

少年「え・・・」

有紀「苦笑して」もう死んでるようなもんだ
から。どうぞ」

「誰だッ」と遠くから声。

有紀「やば、警備員」

少年「くそッ」

少年、逃げようとする。
足がもつれて転ぶ。

有紀「あんた鈍くさ過ぎッ」

有紀(N)「私は、のろまな少年を連れて、逃
げだした」

走る地下鉄。車内。

有紀「なしてあんなどこにいたの？」

少年「・・・構図を、確認したかったんだ」

有紀「ふうん」

少年「・・・警察に言うつもりかよ」

有紀「・・・いいよ、黙っててあげても」

少年「金なんかないからな」

有紀「いらぬよ」

少年「・・・じゃ、どんな条件だよ」

有紀「見せて、鷲描くところ」

少年「は？」

有紀「いいよね忠志君？」

少年「お前、何で俺の名前・・・」

有紀「スケッチにサインしてあった」

少年(忠志)「汚ねえぞ・・・」

有紀「君、高校生？」

忠志「関係ねえべや」

有紀「いいしよや別に。教えてよ」

忠志「ぜってー言わねえ」

有紀「私に逆らっていいと思ってる？」

忠志「・・・(ため息で)十四」

有紀「中学生？中学生でもあんな騒ぎ起こし
ちやうんだ」

忠志「(制して)声大きいよおばさん」

有紀「まだ二十なんですけど」

忠志「おばさんだべや・・・」

有紀「・・・なしてあんなに絵、上手いの？
ずっと練習とかしてた？じゃなくて才
能？ねえ、将来はイラストレーターと
か？」

車内アナウンス「次は大通公園。次は大通公
園。降り口は・・・」

忠志「降りるぞ」

二人、改札を抜けて。

有紀(N)「私たちは小さな喫茶店に入った。

忠志は注文する事もなく、ノートパソコ
ンを開きだした」

有紀「ねえ、どこに描くか早く教えてよ」

カチャカチャと叩く音。

忠志「(遮って)あんた、どっかで見た事あ
る」

有紀「え？」

忠志「テレビかなんかに出た事ない？」

有紀「・・・んな訳ないしよや」

忠志「そっかなあ。何か見た事あんだけど」

有紀(N)「思い出したくない。そう思えば思うほど、私の頭の中に、ホーンが鳴り響いた。スタート台に立った時の、震えるような緊張感が私を包み込んで、耐えきれずに私は叫びそうになった」

有紀の回想。

鳴り響くチアホーン。

ザッザッと、斜面を切り裂くスキーの

エッジ音。

場内アナウンス「さあ、市ノ瀬選手の第一エアは！」

豪快にジャンプする有紀。大歓声。

場内アナウンス「スプレッドイーグル」

有紀「どうして驚なの？」

忠志「・・・別に。意味なんてないし」

有紀「ウソ。そんな訳」

立ち上がる。

忠志「行くぞ」

出て行く。

有紀「ちよつとッ」

ロッカーから、ガサゴソと荷物を取り出す忠志。

ガチャガチャとスプレー缶をリュックに入れていく忠志。

床に落としてしまう。

有紀「(笑って)興奮し過ぎ」

忠志「・・・うっせえ」

有紀「何処に描くの？」

忠志「ここ」

有紀「何処？」

忠志「だから、この真上」

有紀(N)「案内板に表示されていたのは・・・札幌テレビ塔だった」

階段を上がる二人。

ドアを開ける。途端に、猛吹雪。

有紀(N)「雪にたたき付けられ真っ白になっているはずなのに、テレビ塔はやっぱり赤茶けていて。当たり前だけど、お店は何処も閉鎖されていた」

忠志「今さ、デジタル時計改修中だべ？だから、いろんな人が結構出入りしてて、警備が緩いんだよ。で、こんな天気だべや。工事は中止で、誰もいない。奇跡ってやつ？」

有紀「・・・テレビ塔に、描くの？」

忠志「デジタル時計の後ろ、スペースあるからそこに布持ち込んで、低気圧が居座ってる間に完成させて、で、デジタル時計に今段幕かかっているべ？あそこにドーンって、張り出してやんだよ。雪止んだ時に俺の驚があるんだテレビ塔に。みんなさ、なまら驚くべ？札幌中の奴らに見せつけてやんだよ。どうだ！って」

有紀「・・・やっぱりそうだ」

忠志「あ？」

有紀「あなたも飛びたいんだ。だから・・・」

忠志「(遮って)あんただべ、それ」

有紀「え・・・」

忠志「モーグルの選手だろ、あんた」

有紀「・・・どうして」

忠志「さっき・・・パソコンで検索した。すぐ出て来たよ。最近不振の市ノ瀬選手。3Dに対応出来ず、最近は予選も通らず、強化指定選手も外されて・・・このまま終わってしまうのか？みたいな記事ばっか。あのさ、今、やってんだろ、何とかって大会、旭川で。あんたは何でここにいるんだよ」

有紀(N)「深呼吸して、私は精一杯の笑顔を作ってみせた」

有紀「スプレッドイーグル。翼を広げた驚。私の必殺エア」

忠志「え？」

有紀「高校時代は無敵だったんだよ。でもさ・・・もう時代遅れなんだ。知ってる？3Dっていうの。今のエアはさ、縦回転OK。中国雑伎団かつっの。っていうかさ、スキーマの技術と関係ないしよ」

有紀の携帯が鳴る。有紀、出ない。

忠志「出ろよ」

有紀「いいの。どうせコーチからだし」

携帯、止まって。

忠志「俺の絵見てどうすんの？何か変わる訳？」

有紀「君だって飛びたいから驚を描いているんでしょ？どうせいじめか何かで・・・だから・・・」

忠志「遮って）あんたに関係ねえべ」

強風。

よろける忠志。有紀、抱き留めて。

有紀「どうして？」

忠志「あ？」

有紀「こんな、風に吹き飛ばされるくせに、どうしてあんな力強い驚なんか描けるのよ」

強風、再び。

有紀「力強くて、俺は天空を飛ぶんだ！っていう希望に溢れてて、それでもいて何だか優しくて・・・何か羨ましくて、泣きたくなくて、心にグサって刺さって・・・あなたの絵見たからって変われるなんて思っていない。でも私はまた飛べるようになりたい。だから・・・見たい」

忠志「・・・勝手にすれや」

鉄塔の間を風が吹き抜けていく。
非常階段を上がっていく二人。

有紀(N)「私たちは、ただ黙々と非常階段を上がっていった。寒さに耳がちぎれそうになり、忠志は強風に何度も転げ落ちそうになり、そのたびに私は支えた」

有紀「・・・どっかケガしてんの？」

忠志「ケガだったら、楽だろうな」

有紀「・・・どういう意味？」

忠志「焦って）別に」

有紀「何なの？」

忠志「何でもない」

有紀(N)「動かない足を引きずるように上がっていく忠志に、私はそれ以上聞く事が出来なかった」

二人、立ち止まって、ドアを開ける。

有紀(N)「ようやく辿り着いたデジタル時計。忠志は焦りながらも持っていた布を広げて、スプレー缶を取り出して、下書きもなしに吹きつけはじめた」

有紀「私にもやらせて」

忠志「勝手にすれや」

スプレー、吹き付ける音。

有紀(N)「ちよつとはみ出たぐらいで露骨に嫌な顔をする忠志にちよつとムカついたけど、ちゃんと指示通りに訳も分からずやってたら、いつの間にか鳥の形になっていて・・・私はとても楽しくて楽しくて、時間が立つのなんてすっかり忘れていた」

風の音が消えてー

忠志「・・・完成」

有紀「うん」

忠志「風、やんだ」

有紀「・・・低気圧、行っちゃったんだね」

忠志「もうすぐみんな戻ってくる。その前に、

段幕の上に張り出さないと」

有紀「・・・ねえ」

忠志「ん？」

有紀「あなたは、今ここにいて、みんなに言いたい。だからこんな事やるって言ったよね？」

忠志「ああ」

有紀「見せつけてどうするの？」

忠志「どうもしねえよ。それ以上でもそれ以下でもない」

有紀「確実に捕まるんだよ、人生台無しだよ。分かってる？」

忠志「だから、台無しになる人生とかねえんだよ。もう分かってんだべ？」

有紀「・・・病気か、何か？」

忠志「筋ジストロフィー」

有紀「え・・・」

忠志「俺の場合は先天性なんとかって奴。で、手とかさ、もうすぐ全然動かなくなるんだってさ。それでもさ、医者に言わせるとまだいい方なんだって。普通は小学生の頃から、動かなくなるらしいから。でもさ、さすがに最近では進行が早くなってきて。成長期に入るとどうしようもないんだって」

有紀(N)「私は必死に言葉を探した。何か言わなきゃ、と思った」

忠志「もうすぐ絵が描けなくなる。だから、俺は、俺がちゃんと生きてたって証残したい。俺は確かにここにいたんだって、みんなに見せ付けてやりたい。分かって

る。意味ないし大迷惑だし。(声が震えてくる)でもさ、何かやってないとおかしくなりそうなんだよ・・・驚書いて、みんなびつくりしてて、そういうの見てニヤニヤして、俺、マジでなまら気持ち悪い。でもさ、そういう時しか生きてる感じしないんだよ。あんたなら分かるべ？」

有紀「え・・・」

忠志「・・・言っただじやないかあの時」

有紀の回想。

最初に会った時の二人。

有紀「いいよ、刺しても」

少年「え・・・」

有紀「苦笑して」もう死んでるようなもんだから。どうぞ」

有紀「モーグルでね、エアで飛ぶときに風が吹くの。きつと神様が言ってるんだと思う。もつと飛べって。高く飛ぶ驚になれって」

忠志「神様なんていねえっつーの」

ドアが開いて。

有紀(N)「私たちは外に出た。爆弾低気圧なんてまる嘘だったかのような快晴の冬の空。デジタル時計の上によじ登った。大通公園が一望できた。綺麗だった」

バサツと布を広げて。

有紀(N)「私たちは、壮大な驚の絵をひろげて掲げた。忠志の顔が誇らしげで、何だかとてもカッコよく見えた」

忠志「何見てんだよ」

有紀「ありがとう」

忠志「は？」

ドカドカと非常階段が上がってくる足音。
「何やってるんだッ」と警備員達

有紀「やばッ。逃げないと」

有紀(N)「忠志は何も答えず、デジタル時計の端に立ち、両手を広げた。・・・私は、理解してしまった」

「はやく降りろッ」と詰め寄って来る警備員達。

忠志「あんたは、飛べるようになるよ、きつと」

有紀「ちよつと、何言ってるのよ・・・」

忠志「ありがとう。つき合ってくれて。楽しかった。人生最後の日としては、上出来じゃあね」

タン、と床を蹴る靴音、あつてー

悲鳴。

有紀「忠志ッ」

その瞬間、床を蹴る靴音、もうひとつ。

有紀(N)「一緒に死のうとか、そういう事じやなくて・・・ただ私は飛べると思った。飛びたい、ではなく、飛べると思った」

瞬間、激しい突風！

静寂―

有紀(N)「私は忠志を抱きしめた。彼の、何とも言えない驚いた目がおかしかった」

ドサツと、雪の上に落ちて。

有紀「イッタァイ」

忠志「・・・何だよこれ」

有紀「神様はいないけど、私いるから」

忠志「・・・」

有紀「私が、いるから」

忠志「・・・ふざけんなよ。(涙溢れて)あんたがいるから何だっつてんだよ。治してくれんのかよ？治せや、俺の病気治してみれやッ」

有紀(N)「忠志は私に掴みかかって、駆け付けた警備員に引き離されて・・・慌てて

やってきた両親に殴られては号泣して、先生や警察に掴みかかっては号泣した」

テレビのニュース。

女子アナウンサー「・・・と言うわけで専門家の意見が一致するところとしては、低気圧の影響で発生したダウンバーストが、一度地面に叩きつけられた後、テレビ塔の斜面にそって、上昇気流になったのではないかと？という事でした」

コメンテーター「ですが、あの時、低気圧は札幌上空を通過した後ですからね。そうなるともう誰にも説明はつかないでしょう」

女子アナウンサー「・・・それは」

コメンテーター「奇跡ですね。まさに、スプレッドイーグルの奇跡、です」

女子アナウンサー「(咳払いして)」

コメンテーター「・・・ハハ、ただの犯罪です」

女子アナウンサー「いえ・・・素敵だと思えます」

有紀(N)「マスクミが騒いでいる時には、私はもちろん警察にこっつりと絞られていて、とりあえず解放された時にはすでに騒ぎは終わっていて・・・待ってくれていたのは、コーチだけだった。頭を下げた私に、ただ呆れただけのコーチは、たったひと言私に言った。辞めるなよ。私

は、泣いた」

ザッザツと、斜面を切り裂くスキーのエッジ音。

有紀(N)「とは言いつつ、逃げ出したあげく事件を起こした選手をすんなり復帰させてくれるほど甘い世の中ではなく、私はただ黙々と練習するだけで、しかも3Dは相変わらず飛べなくて。やっぱり辞めちゃおうかなあと思っていた時に、忠志がやってきた」

忠志「なまら上手な、スキー」

有紀「何か有名になってない？あちこちで君の絵見るんだけど」

忠志「よく分かんないけどさ、評価された。君の絵は希望に満ちてるって」

有紀「あんな騒ぎ起こしといて何が希望だったの」

忠志「あんたのせいで死に場所なくなっつて、死ぬほど忙しくなった」

有紀「面白くないから」

忠志「ギャグじゃねえよ」

有紀「マジで返さないでよ。つまんない」

忠志「・・・責任取れや」

有紀「何それ」

忠志「・・・愛の、告白」

有紀「(大笑い。止まらない)」

忠志「(真剣に怒って)笑うなや」

有紀「マセガキ」

忠志「うっせえ」

有紀「考えてあげてもいいよ」

忠志「え？」

有紀「五年経ったらね」

忠志「・・・何だよそれ」

有紀「(笑って)じゃ、私練習あるから」

忠志「あのさ・・・」

有紀「ん？」

忠志「あん時、あんたが鷺に見えた」

有紀「え？」

忠志「翼広げた、雄大な鷺。スプレッドイー

グル」

有紀「(笑って)当たり前っしょ」

忠志「俺も飛ぶから」

有紀「うん」

忠志「手、動かなくなったら足で描く。足が

動かなくなったら口で」

有紀「うん」

忠志「待っててよ五年。なまらいい男になる

から」

有紀「いいよ」

忠志「マジで？」

有紀「ま、その頃には私ますますいい女にな

って、なんまらハードル高くなってるけ

どね」

忠志「望むところだっつーの」

高く、高く飛んでいく。

有紀(N)「その鷺は私に言う。お前はどうかして飛ばないんだ？私は答える。私も飛んでみせる、と」

有紀の想像。

スプレッドイーグルが、自らの存在を誇示するがごとく、甲高く咆吼して――

終わり

有紀の想像。

大きく羽ばたく翼の音。